

1. ドゥーニアメーベル社 創立以来、障害者 雇用を進めている	1
2. Instagram インフルエンサーの ビレグサイハンさん	2
3. DET フォーラムモンゴル 会長エンフニャムさん 「障害は人ではなく 《社会の側に》ある」	3

# DPUB 2 ニュースレター

## 1. 「ドゥーニアメーベル社」創立以来、障害者雇用を進めている

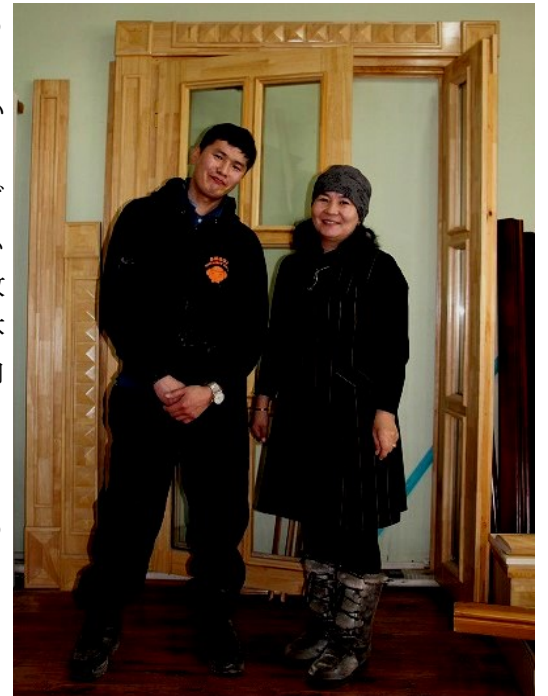


DPUB2では現在、障害者を雇用している企業を訪問して取材を行っています。11月下旬には、ウランバートル市の中心部から1時間ほど離れたバヤンゴル工場地帯にあるドゥーニアメーベル社を訪ねました。

同社は、トルコ人とモンゴル人の夫妻が1998年にウランバートルで立ち上げた木製家具メーカーです。個人客に加え、労働社会保障省をはじめと

する官公庁との取引も多く、テーブルや椅子といった家具から、ドアや窓枠、階段などの内装まで幅広く手掛けています。

そんな同社は、「仕事につけず家にいる障害者に社会に出る機会を与えたい」というアルトントス (ALTUNTAS) 社長の強い思いから障害者も積極的に雇用してきました。苦手なことや働き方を個別に相談するなど気を遣う面もあるそうですが、妻のニャムブー副社長は「うちは従業員20人のうち半数以上が創業当時のメンバーで、会社全体が一つの大きな家族のよう。社員は皆、身内のような存在なので、まったく問題ではありません」と笑顔で話します。



軽度の脳性まひと言語障害があるガンドールグさんは、障害者国立リハビリテーションセンターで大工技術を学んだ後、同社で実習していた時に社長に見込まれ、2007年より社員として働いています。

「以前は、自分は何もできない人間だと思っていたが、この会社のおかげで自分にもできることがあると気が付いた」と話すガンドールグさん。「一番得意なのは窓枠づくりです」と話す表情は自信に満ちて輝いています。

木製造りの同社の中は、木材の香りと社員の活気、そしてあたたかさに満ちています。

## 2. Instagramインフルエンサーのビレグサイハンさん

DPUB2の広報担当スタッフ2人が、インフルエンサーのビレグサイハンさん（通称：サフナーさん）をお訪ねしました。

サフナーさんには生まれた時から脳性まひがありますが、2019年に開設したInstagramのフォロワーは、モンゴルの若者を中心に、いまや1万7000人以上に上ります。投稿される写真や動画は、部屋を掃除したり、友人と出かけたり、仕事をしたりというサフナーさん自身の日常の一場面を切り取ったものがほとんどで、「障害者を特別扱いたくないでほしい」「みんな同じ」という思いが込められているそうです。



「僕が常に前向きでいられるのは、障害のない姉や兄弟たちと分け隔てなく育ててくれた両親のおかげです」と話すサフナーさんは、自分と同じ障害者や、困難に直面している人に勇気を出してもらおうと、すべての投稿にポジティブなメッセージを添えることにもこだわっています。

そんなサフナーさんは、現在、週末に大学院で学ぶ傍ら、通信事業やエンジニアリング、インフラ、不動産、鉱山事業、消費財流通などの分野で事業を展開するモンゴル大手企業MCSにも所属し、障害者の就労環境に関する調査と提言を行うなど、精力的に活動しています。

DPUB2としても、行動力と発信力を併せ持ったサフナーさんと連携しながら、障害者雇用に向けた啓発と企業への就労促進を進めていきたいと思っています。





### 3. 「DET フォーラムモンゴル」 会長エンフニャムさん 「障害は人ではなく《社会の側に》ある」

「DETフォーラムモンゴル」会長を務めるエンフニャムさんのご自宅に伺いました。

「DETフォーラムモンゴル」は、障害のある人とない人が分け隔てられることなく、それぞれの人格と個性を尊重し合う共生社会の実現を目指すワークショップ型のDET研修をモンゴルに普及しているNGOです。幼い時にポリオにり患し、歩けなくなったエンフニャムさんは、DPUB2の先行プロジェクトであるDPUB1の中でDET研修に出会いました。



以前は、障害者が社会参加するためには本人が頑張らないといけないのだと思っていたという彼女にとって、DET研修を通じて「障害は社会の側にあり、みんなが協同してなくさなければならない」という「障害の社会モデル」を学んだことは、大きな転機になりました。この概念をモンゴルに普及しようと決意したエンフニャムさんは、その後、ファシリテーター養成講座も受講し、2017年、仲間と一緒に「DETフォーラムモンゴル」を立ち上げました。



精力的に活動する傍ら、今年の夏からは南ゴビで鉱物資源の採掘事業を手掛けるOyuTolgoi社の本社で事務職として勤務しています。その理由について、「障害者が働かないと社会にメッセージを伝えることができない」と話すエンフニャムさん。実際、同僚のノミンさんは、「彼女が入社したことで、社内のウォーターサーバーの高さが高すぎることに気が付いたり、何気なく通っている道路がいかにバリアフリーでないかということに意識が向

いたりするようになりました」と話します。日本の協力から学んだ人材がモンゴル社会に変革の波を起こしつつある様子を大変嬉しく感じるとともに、DPUB2としても障害者雇用を進める企業の事例を積極的に発信していきたいと思います。

✉ [dpub.jica@gmail.com](mailto:dpub.jica@gmail.com)

📍 United Nation's Street-5, Chingeltei district 4th khoroo, Ulaanbaatar, Mongolia-15160  
Ministry of Labor and Social Protection

📘 <https://www.facebook.com/jicadpub1and2>

🌐 <https://www.jica.go.jp/project/mongolia/015/index.html>

